

幼稚園の保護者が保育者と保護者の協働の輪に入っていくプロセスの描出

—保護者の語りにもとづく正統的周辺参加と創造過程の検討—

学籍番号 249210

氏名 関 映里

主指導教員 戸田 有一

副指導教員 小松 孝至

1. 背景

1.1 はじめに

就学前教育を担う諸施設において、家庭支援や家庭との連携は不可欠な課題である。一方で、PTA 活動などに参加する保護者は「時間的・心理的負荷」を感じやすいことが指摘されている（有馬ら，2017）。また、保護者の参加は、園が保護者に活動への参加を依頼し、参加による成果が園を介して子どもの生活・経験に反映されるという「園⇒保護者⇒園⇒子ども」という回路に位置づけることが一般的である。しかし、この回路のみでは、園と家庭が別のコミュニティとして捉えられ、保護者にとっての参加が「園の意に沿った活動」として受け止められやすく、参加の価値が保護者たちに十分共有されにくく、それが負担感の要因にもなっている可能性がある。そこで、園と家庭という別々の集まり同士が連携する関係と見るのではなく、保護者と保育者の幼稚園という実践共同体への参加が、どのように成立し深まるのかという過程として捉え直す視点が求められる。

1.2 研究の目的と方法

本研究の目的は、幼稚園における①保護者の参加の実態と意義、②保護者が保育者および他の保護者との協働の輪に入っていく過程、③その過程が保護者自身に何をもたらすのかを描出することである。方法として、実習園において参与観察を行い、参加の様相が異なる4事例を抽出して事例分析を行った。あわせて、PTA 役員経験をもつ保護者5名に協力いただき半構造化インタビューを実施し、参加の意味づけや心情の変化を聞き取った。分析にあたっては、Lave & Wenger の正統的周辺参加（LPP）を分析枠組みとし、保護者の参加を「保護者自身」「保護者同士」「幼稚園（保育者）との関係」という3つの側面の変容から整理した。そのうえで、保護者が保育者との協働へと向かうプロセスのモデル化を試みた。

2. 結論と提言

2.1 結論

保護者の参加の意義は、幼稚園という実践共同体への参加を通じた学習過程として位置づけることができる。保護者と保育者の協働へと移行する過程は、個々の意欲や負担感に還元されるものではなく、①参加の入口の整備、②小さな関与の承認と価値づけ、③縦（保育者）・横（保護者同士）の関係形成を足場として周縁的な参加からしめるものである。そして、参加の継続に伴い、園理解の深化や、当事者意識、参加者としての自己定位が更新されていく学習過程として整理できると考えられる。さらに、このプロセスは4段階に整理でき、第1段階「不安ととまどい」、第2段階「適応とつながりの拡大・深化」、第3段階「主体化と役割発揮」を経て、第4段階では、園運営や課題を共に考える方向（「協働と創造」）と、参加が生活の一部として定着していく方向（「安定と成熟」）へ複線化しうることが示唆された。

また、協働の輪に入っていくことは、保護者に①園への安心感・所属感の形成、②横のつながりを通じた支え合いと学び、③園理解と当事者意識の深化、④参加者としての自己効力感や自己定位の更新などをもたらしうることが示された。

さらに、保護者の参加には、園主導で体制が整えられる参加（園⇒保護者⇒園⇒子ども）と、保護者が園や子どもと直接関わる参加（保護者⇒園・子ども）という2つの回路が存在する。後者は、参加の意味が保護者自身に可視化されやすく、前者に伴いがちな負担感や強制感の緩和に寄与しうる。したがって、協働の輪を広げ、参加を継続しやすいものとするためには、2つの回路を補完的に設計し、入口期には負担の小さい参加機会を広く保障しつつ、経験の蓄積に応じて直接関与の機会を適切に位置づけることが重要であることが示唆された。さらに、別の回路も存在する可能性も踏まえ、保護者の実態やニーズに合わせて参加の形態を多様化していくことが大切であると考察した。

2.2 提言

本研究によりPTA活動を含む保護者の参加に対する様相の解像度が上がり、理解が深まったと思われる。その見え方からの示唆にもとづき、①参加の入口の整備、②見通しを支える情報提供、③縦横のつながりが育つ場の設定、④2つ（あるいはそれ以上）の回路を前提とした参加設計、⑤第4段階の複線化を踏まえた支援という5つの観点から、勤務園での実践に向けた支援や体制づくりを提言した。

なお、提言の整理にあたっては、園現場の知見と照らし合わせながら、自園での実践に結びつけるための参考として、園長経験者等との私信で得られた見解も補助的に参照し、考察を深めた。